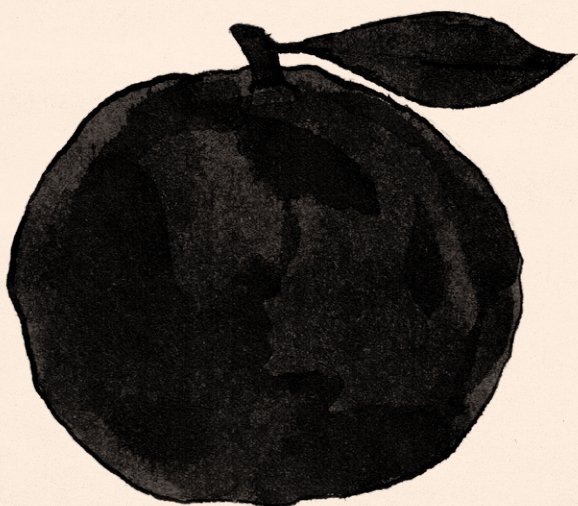


五十嵐靖晃 海渡り

IGARASHI Yasuaki

“Umievatari”



津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と文化的空間の創造を目的として1984年に始まりました。アーティストの五十嵐靖晃を招聘し、津奈木町を構成する人、物、歴史、文化などさまざまな要素をアートでつなぎ、地域に根ざした新たな文化的活動を生み出そうと2018年に始まったのがアートプロジェクト「つなぎまちのつなぎかた」です。

五十嵐は、3年間にわたるフィールドワークを経て、海沿いの集落に密やかに伝わる「弁天様のお祭り」を人々との協働によって持続可能な現代アート作品として再構築した《海渡り》を2021年秋に生み出しました。「弁天様のお祭り」は、潮の満ち引きと関係のある旧暦によって執り行われるため、年によって《海渡り》の日程も変わります。

5年目を迎えた今回は競舟チーム「津奈木海龍」や、つなぎ美術館のインターンシップに参加していた国内外の大学生・大学院生などの協力もあり、賑やかな「海渡りの日」となりました。また、「糸あげ」と「弁天様のお祭り」を初めて同じ日に行いました。

民間信仰とアートが接続して生まれた《海渡り》は、歴史と伝統を大切にしながらもアーティストと人々の協働によって地域とともに変化しながら後世へと受け継がれていきます。

## 令和7年《海渡り》スケジュール

① 海渡りの日	10月18日(土) 11:00～15:00 19日(日) 11:00～17:00
《海渡り》作品公開	10月20日(月)～11月14日(金)
② 組紐ワークショップ	10月22日(水) 9:30～14:30
③ 糸あげの日	11月15日(土)*旧暦9月26日 9:00～11:00
④ 弁天様のお祭り	11:30～14:00

会場 旧赤崎小学校付近(熊本県葦北郡津奈木町福浜165番地)



2025年10月18日(土) 11:00~15:00、19日(日) 11:00~17:00

# ① 海渡りの日

《海渡り》の制作は5年目を迎えました。今年は、地元の制作メンバー・消防団、つなぎ美術館のインターンシップに参加している国内外の大学生・大学院生、昨年は日本選手権で不在だった競舟チーム「津奈木海龍」、地域内外からの参加者など、多種多様な人々が集まりました。糸に意識を集中させる人、ゴツゴツした足場に苦戦する人、傍らでピナやカニを見つける子供達、沿岸から温かな視線を送る人達など、制作への関わり方も人それぞれ。経験者に支えられながら安定した雰囲気ができましたが、途中では糸が切れるハプニングがあり、交換の時期が近いことを認識する年となりました。完成後、競り舟の乗船体験、打ちあげにも多くの人が残り、賑やかなうちに海渡りの日が過ぎていきました。

## 「それぞれの存在で成り立っている」

林田 昭二さん 赤崎建設委員長

海の上に校舎が建つ前は、いまの体育館やプールあたりに校舎がありました。当時は小学生も多く、運動会となると親や親戚が集まりグラウンドに入りきれないほどでした。お昼になると潮の引いた裸島や弁天島あたりにシートを敷いてお重を広げたものです。多くの人が集まって賑わっていると、そんな昔のことを思い出しました。《海渡り》は町、美術館、アーティスト、地域、地域内外からの参加者それぞれの存在があって成り立っている稀有な行事です。今後も変化していきながら多くの人に関わってくれることを期待しています。

## 「心が自然と一つになっていく」

劉宸均さん 国立中山大学 人文・テクノロジー学際型学士學位プログラム

《海渡り》は、外国人である私にとって、日本の祭りに最初から最後まで深く関わることができた、忘れがたい経験でした。鳥居が解体され、柱が設置されていく様子を見ながら、言葉が十分に通じなくても、人の手と動きによって場が少しずつ整えられていくことに、強い感動を覚えました。弁天島へとつながる崎嶇な道を進みながら、皆で赤い糸を引いていく中で、心が自然と一つになっていく感覚を覚えました。糸が手から空へ放たれ、拍手が広がった瞬間、胸の奥がじんわりと温かく満たされました。地域の方々や子どもたちとの交流、そして最後に皆で囲んだBBQの時間も含めて、この一日は、人と地との優しいつながりを、身体を通して実感した、かけがえのない一日となりました。







みかん山から不知火海を望む。左から裸島、弁天島、黒島。

## ② 組紐ワークショップ

2025年10月22日(水) 9:30~14:30

津奈木小学校と連携した地域学習も今回で4回目となりました。事前準備をする紐制作会場をつなぎ文化センターが改修工事のため、つなぎ温泉四季彩のトレーラーハウスに変更しました。学校終わりに小学生が集まり組紐の体験や、待ち時間に宿題や読書のほか、自分が推している人の話などに花を咲かせています。地域学習は3年生約15人がグループに分かれ、作品鑑賞、組紐ワークショップ、風景スケッチをしました。雨で弁天島へ渡ることはできませんでしたが、島の頂上に鎮座する弁天様をイメージして描いたり、雨の風景を捉えようとする様子が見られました。最後は、風景スケッチに描いたポイントなどを発表しながら、鑑賞し合いました。

<sup>すばる</sup>  
福田 昂さん 小学生

《海渡り》の赤い糸に風があたると音が聞こえると五十嵐さんが言って聞いてみました。組紐は立ってしたほうが集中できて楽しかったです。弁天様が見えなかったからイメージして描いたら、その絵をみんなが良いと言ってくれたのがうれしかったです。海渡りの日にも参加して、また来年も行きたいと思いました。

<sup>ちなつ</sup>  
福田 千夏さん 昂さんの母

参加するのは上の子の時と合わせて2回目になります。子供たちが集中して、黙々と組紐をしている時の、トントン…、トントン…という音がいいです。風の音、波の音、雨の音を感じながら静かに手を動かす姿が神秘的でした。大人はここでコーヒーでも飲めたら最高ですね(笑)。地域の伝統や先祖への思いが今後も繋がっていくことを願います。

## みかんは海を見てる

2025年6月18日(水) / 松田テル子さんのみかん山

毎年発行される《海渡り》タブロイドの取材企画では、津奈木町で暮らす人々と五十嵐との対話を通じてこの土地で続いてきた文化を紹介しています。今年度は、《海渡り》が始まる前から一人で「弁天様のお祭り」を続けてきた、松田テル子さんのみかん\*作りを訪ねました。

昭和35年から65年間、みかんと向き合ってきたテル子さん。果実の良し悪しを瞬時に判断しながら剪定する迷いのない所作からは、長い歳月の積み重ねが伺えます。当初は「みかんは海を見てるのかな?」と考えていた五十嵐は、テル子さんとの対話を通じて、「そうか、弁天様を見てるのか」と気づきました。足繁く通ってまなざしを注ぎ、向き合い続けて行くこと。《海渡り》とテル子さんのみかん作りの共通点が見えた取材になりました(みさこ)。

\*この地域では、柑橘類全般のことを「みかん」と呼んでいる。





### ③ 糸あげの日

### ④ 弁天様のお祭り

2025年11月15日(土)\*旧暦9月26日

糸あげの日 9:00~11:00

弁天様のお祭り 11:30~14:00

弁天様のお祭りを多くの人と共有して8回目となります。今年は潮汐の関係で糸あげを同日に開催する初の試みとなりました。参加者は太刀魚漁に使用する漁具と同じ形をした糸巻き機に、展示を終えた糸を巻き付けていきます。巻く早さ、巻き方には個性が表れ、参加者はときに糸が交錯しながらも、互いの関係を意識しながら順調にすべての糸を巻きあげました。鳥居を設置すると、《海渡り》によって開かれていた島には境界が生まれ、神域の存在を感じ取ることができます。

弁天様のお祭りでは島の頂上へと登る道が険しくなってきたため、神鷹由美さん(祠の管理人)を中心に数人が登り、弁天様の祠を整えお供えした後、鳥居の前で待つ人々と合流して、参加者全員で弁天様に津奈木町の安泰を祈りました。直会では地域内外の人々が混ざり合い、この場所での出会いを喜びながらお料理とお酒を楽しんでいました。

#### 「地域が大切にしてきたもの」

伊藤 章史さん <sup>あきふみ</sup> 津奈木町消防団第1分団長

「この地域は神様が多く、守ってくれているから大切にしたい」と言われてきました。將軍さん、金刀比羅さん、蛭子さん、山神さん、お不動さん、地島さん、お正月や七五三の時などにまわって挨拶をしていました。今では社殿の老朽化や管理人の不足などによって維持することが難しくなってきましたが、昔から地域が大切にしてきたものというのは、その地域らしさの象徴でもあります。《海渡り》と弁天様のお祭りもその一つです。島へ登ることが難しくなってきたので、祠の管理も含め続けていける形を考えていけたらと思っています。

#### 「海はそっと関係をつないでくれる」

金子松 美香さん <sup>かねこまつ</sup> <sup>みか</sup> 大阪公立大学大学院 都市経営研究科 博士前期課程(当時)

不知火海は津奈木だけの風景ではなく、関西で暮らす私の生活とも静かにつながっているように感じられた。海渡りの日、糸あげや弁天様のお祭り、そして直会で人びとと過ごした時間が重なり、移動や出会いの記憶はいつのまにか波のリズムと溶け合っていく。潮の満ち引きは境界というより行き来で、離れた場所や人をやさしく結んでいるように思える。少しベタな言い方だけれど、海は分け隔てるものではなく、そっと関係をつないでくれる存在なのだと思う。その感覚が、また津奈木へ向かう私の歩みを静かに支えている。



## 記述される線、あるいは固有名詞を持たぬ者たちの肖像

土屋貴哉 (美術家 / 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授)

海水は、塩分濃度三・四パーセントの液体としてそこにあり、月との距離に従って絶えずその垂直方向の深度を変えている。不知火海。潮位が一定の数値を下回るとき、海面下に隠蔽されていた堆積物が路面として露呈する。小岩が点在し、泥を孕んだその道は平坦ではない。足底は、不規則な凹凸と滑りやすい硬度を感知し、直立を維持するために微細な筋肉の調整を絶えず繰り返す。

五十嵐靖晃という一人の美術家が、この海岸線に立ってから五年という時間が経過した。本年度も十月、私は佐賀大学芸術地域デザイン学部の学生たちとともに、この物理的な現象のただ中に身を置いた。

私がここで行おうとしているのは、感傷の吐露ではない。ただ、そこで起きた事象の記述である。

一人一本の、赤い紐。化学繊維で編まれたその細い構造体は、一端を陸に固定され、もう一端を運ぶ者の掌に委ねられている。身体が、島へと続く不確かな道を進む。日暮れとともに潮位は再び上昇を開始し、路面は境界を曖昧にしながら海水に侵食されていく。時間という物理的な制約の中で、身体は加速し、呼吸数は増大し、視線は対岸の固定点へと収斂される。

初日に三十本。二日目に七十二本。——合計百二本の紐が、陸と島の間を並行に架け渡される。この反復的な行為の只中で、「固有名詞を持たぬ者たち」という在り方が、私の思考に浮上してくる。それは、個人の名前を剥ぎ取り、ただ「行為」の集積として世界を記述したときに見えてくる、匿名の存在たちの肖像である。

不均一な地面を踏み締め、一本の線を架け渡すという「移動」と「接続」の反復。両岸に固定された瞬間、紐は空中で張力を得て、保持する指先に微かな、しかし明瞭な振動を伝える。それは風による物理的な共鳴であり、張られた線が空間を分断し始めたという信号である。

旧赤崎小学校の校舎の影。かつて子供たちの声が吸い込まれたコンクリートの壁面を背に、若者たちの身体が動いている。彼らは、大学という記号や、学生という身分を一度、その場に脱ぎ捨てている。

一人の身体が屈み込み、足裏で岩の感触を確かめる。一人の身体が直立し、赤い振動を指先に受ける。これらの動作に個別の名前を与える必要はない。彼らは、この風景を成立させるための「器官」として機能し、その瞬間、一人の「固有名詞を持たぬ者」へと変容している。

学生たちが現地で見せた身体の変容について、私はこう記述する。それは、彼らの内部にある「個」の輪郭が、過酷な路面を踏み締め、百二通りの振動を掌に受けるという「群」の行為の中に溶け出し、一時的に消失したことによる、自律的な神経系の調整結果である。と。瞳孔は開き、視線は自己の内面ではなく外部の物理現象へと向けられ、皮膚は潮風と赤い線の振動を等しく受容している。自らの輪郭が曖昧になり、風景の一部として記述される存在へと至ること。それは、教育という枠組みを超えて、身体が世界との境界を再編していくプロセスの記録に他ならない。

赤い糸は、やがて回収される。——物理的な道が消えたあとに残るのは、空中に静止した百二本の残像と、不均一な岩の感触、そして分子レベルで残留する振動の記憶だけである。

作家の手を離れ、風土の呼吸となった《海渡り》。その静かなる拡張を、私はこれからも一人の記述者として、この場所で見守り続けていきたい。名もなき身体たちが運び、繋いだ赤い線が、不知火海の水平線を書き換え、また潮の中に沈んでいく。その永劫回帰のような運動の傍らで。

## 目指す姿勢の先はみかん山にある

五十嵐靖晃

津奈木町の「新しい海の日」となることを目指して令和3年(2021年)から始まった《海渡り》は今年で5回目を数える。毎年のテーマとして《海渡り》を構成する土地の文化的要素を紹介してきた。これまでは、船を漕ぎ進める競技の「競舟」、郷土料理の「ひろす」、道具を作り文化をつなぐ「大工」。そのどれが欠けても今の《海渡り》はない。会期中、それぞれに人の心を動かす場面を作り出す。

今年のテーマは「みかん」。《海渡り》が始まるまで1人で「弁天様のお祭り」を続けていた松田テル子さんは昭和35年に津奈木に嫁に来てから65年みかんを作り続けている。「最初はみかんより島に惚れて来ました」とのこと。島と陸を糸でつなぐ「海渡りの日」の昼食、糸を引き上げ鳥居を元に戻す「糸あげの日」の休憩時間、幟を立て町の安泰を祈る「弁天様のお祭り」のお供えと直会、いつもそこにはテル子さんのみかんがある。津奈木の海を眺め、そこから吹く風を感じ、この地に注ぐ光を浴びて育ったみかんは津奈木の澄んだ海と空にとんでもなく映える。そして、テル子さんのように優しくも芯の通った味がする。

テル子さんは日が昇ってから沈むまでみかん山にいる。その話を聞いた時、みかんを美味しく育てる一番大事なことは時に優しく時に厳しい「愛のあるまなざし」だと知った。それは育てる対象が人でも組織でもアートプロジェクトでも万物に通ずる。同じようで少しずつ違う昨日と今日、繰り返しているようで確実に違う去年と今年、そういった変化に向き合い続ける優しくも厳しい芯のある強さが魅力ある存在を育てるのだ。そこには自然現象を注意深く見守る観察者の目が備わっているともいえる。

津奈木の澄んだ海と空に映える《海渡り》の102本の朱色の糸はどこかみかんに似ている。年に1度、1本1本に1人1人が願いを込めて海を渡す。その糸はこれまで幾度となく海を渡った祈りの歩みの軌跡であり、津奈木の町を見守る弁天様のまなざしを意味する。秋に生まれる年に1度の《海渡り》の風景。冬に生まれる年に1度のみかん山の実りの風景。《海渡り》は今年で5年目。テル子さんのみかんは今年で65年目。《海渡り》が目指す姿勢の先はみかん山にある。

プロジェクト名：つなぎまちのつなぎかた  
作品名：海渡り  
期間：2018年4月～  
主催：津奈木町、つなぎ美術館  
企画・構成：楠本智郎（つなぎ美術館）、濱田真大（津奈木町役場）

記録集

編集：楠本智郎、濱田真大、みさこみさこ  
執筆：土屋貴哉、五十嵐靖晃、楠本智郎、濱田真大  
デザイン：みさこみさこ  
写真：みさこみさこ  
ドローイング：五十嵐靖晃  
発行：津奈木町、つなぎ美術館

2026年3月 初版第1刷発行